

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：23501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23138

研究課題名（和文）米国のオアハカ先住民移民イメージ変容に関する人類学的研究 - 同郷者会の祝祭を事例に

研究課題名（英文）The Image Transformation of Indigenous Oaxacan Migrants in the United States: An Anthropological Case Study of the Festivals Held by Oaxacan Hometown Communities

研究代表者

山越 英嗣 (Yamakoshi, Hidetsugu)

都留文科大学・文学部・准教授

研究者番号：00843822

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：ロサンゼルス・メキシコ・オアハカ州からの移民による同郷会OROは、故郷の祝祭ゲラゲツァを再現する活動を行っている。一般的に彼らは文化的分離主義者と呼ばれ、その閉鎖性が指摘されてきた。しかし、実際のところその構成員はオアハカ出身者に限られず、韓国人やエルサルバドル人、米国人との間に生まれた二世・三世などが含まれていた。彼らはイベントに集う者を「オアハカ人」と呼称するが、これは血統によるカテゴリーではなく、相互交流のなかで構築されるものであることが分かった。そこでは、類似性や近接性が民族の垣根を超えた連帯を生み出しており、それはウィトゲンシュタインの「家族的類似性」概念を想起させる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的意義は、「文化的分離主義者」として米国内で批判にさらされてきたメキシコ移民が、じつは彼らの伝統文化を通じて他の民族とも積極的な交流を行っていることを明らかにし、メキシコ移民に付きまとう排他的・閉鎖的イメージを変革することにある。本研究を通して、近年、世界的に弱体化する多文化社会の復権を考える手がかりとする。

研究成果の概要（英文）：The hometown community association ORO created by Oaxacan Mexican immigrants host their traditional festival called "Guelaguetsa" in Los Angeles. In general, they are called "cultural separatists" and have been criticized for its closedness. However, in reality, their membership are not limited to people from Oaxaca, but also include Koreans, Salvadorans, and second and third generation immigrants born in US. They call the participants who gather at the event as "Oaxacans," but this is not a category based on bloodline but is constructed among different ethnic groups through interaction regardless the race. They create a sense of solidarity beyond ethnic boundaries through finding and realizing the similarities and proximity, which reminds Wittgenstein's concept of "family resemblance."

研究分野：文化人類学

キーワード：メキシコ移民 ロサンゼルス 同郷会 贈与 ゲラゲツァ 家族的類似性

## 1. 研究開始当初の背景

ロサンゼルスにおいて、メキシコ・オアハカ州からの移民によって構成される同郷会メキシコ地域組織(ORO)は、毎年、故郷の伝統的な祝祭であるゲラゲツァを開催し、交流の場としてきた。かれらはオアハカの真正な文化をロサンゼルスで再現・継承することに注力してきた。米国にはこうしたメキシコ人移民同郷会が多数存在しているが、そのなかには、親戚や家族などがオアハカにいることを示し、自分がオアハカにルーツがあることを証明することが加入の条件となっている組織もある。すなわちかれらは、血統主義の立場を取っている。それに対してOROでは、祭りの担い手にも観客にもオアハカにルーツを持たない者が存在する。また、米国人と結婚することで生まれた二世・三世も祭りに参加している。このように、OROは祭りの真正性につよいこだわりを見せる一方で、担い手のルーツに関しては寛容な立場を取る。先行研究では、ゲラゲツァはあくまで「オアハカ移民の祭り」と理解され、こうした点は見落とされてきた。

## 2. 研究の目的

OROは、ゲラゲツァが「オアハカ人ための祭り」であることをしばしば公言する。しかし、上記で述べたことを勘案すると、彼らのいう「オアハカ人」は、必ずしも血統やルーツに制限されるものではないことがわかる。そこで本研究では、彼らが用いる「オアハカ人」が、誰を指しているのか、そしてどのように規定されるのかを検証する。また、オアハカ文化の真正性を重視するOROは、なぜ祝祭の担い手に関してはその原則を適用せず、寛容な態度をとるのかを検証する。このことを通して、排他的・閉鎖的と理解され米国内で批判されてきたメキシコ移民イメージを変革することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究では、文献渉猟と現地調査をおもな研究方法とする。オアハカ移民の同郷会研究は、KearneyやRivera Salgado、Escala Rabadánなどによる研究蓄積が厚い。しかしその多くはFIOBなどミシュテコ族の移民たちによって形成された同郷会を対象とするものが多い。それに対して、本研究が対象とするOROはサポテコ族が主体となって形成された同郷会であり、Xochitl Consuelo(2013)を除いては、研究蓄積は比較的浅いといえる。

現地調査では、ロサンゼルスで8月初旬に開催されるORO主催のゲラゲツァに参加し、祭りの参与観察を行った。また、OROの幹部メンバー、演者、観客への聞き取り調査を行い、そこで語られる「オアハカ人」がどういった基準で選定されているのかを浮き彫りにする作業を行った。また、ロサンゼルスにおけるオアハカ移民の立ち位置を、他のエスニックグループとの関係性から考察する。

## 4. 研究成果

### (1) オアハカ(サポテコ)移民内部でのアイデンティティの差異の表出

OROはオアハカ移民のうち、とくにサポテコ族が主体となって構成された同郷会である。このことが彼らの紐帯を強めているとされてきた。もちろんそうした側面は事実であるものの、本研究では彼らが決して一枚岩ではないことも明らかとなった。すなわち、たとえばオアハカの都市出身者と村落出身者はたとえ同じサポテコであっても互いに差異を感じている。さらにサポテコ同士であっても、異なる地域の出身者であれば言葉が通じないこともある。そのため、遠く離れたロサンゼルスでは故郷では出会うことの少ない異質なサポテコ族同士が出会う場となっている。

### (2) 類似性・近接性に基づく民族性を超えた連帯の構築

ゲラゲツァに参加し、OROとも関係の深いダンスグループ「ウアシャカク」の主催者への聞き取りにおいて、過去に韓国人の参加者が所属しており、ともにオアハカの衣装を着てダンスを練習していたこと、また、韓国人の子どもたちがゲラゲツァ祭に演者として出演したことが明らかになった。韓国人参加者たちは言葉が通じず戸惑いも感じたが、オアハカ文化への敬意を感じたし、年長者を敬うことなど、さまざまな点で親近感や類似性を感じると述べた。ここでは、民族を超えた連帯意識が生まれている。これは哲学者ウィトゲンシュタインが述べるような「家族的類似性」ともいえるだろう。そのため、「オアハカ人」とは相互行為のなかで、近接性・類似性を見出す行為のなかで生成されるカテゴリーであると考えられることができる。

### (3) 近年のオアハカ移民が抱える危機感

近年の米国政府によるメキシコ移民の取り締まり強化や物価高、治安の悪化からロサンゼルスはもはやオアハカからの移民にとって必ずしも魅力的な場所ではなくなってしまった感がある。ORO が他のエスニックグループと積極的に協働する背景には、こうしたオアハカ移民の減少から生じる危機感が存在していることも明らかになった。

### 参考文献

Chavez, Xochitl Consuelo. 2013. "Migrating Performative Traditions: The Guelagueta Festival In Oaxacalifornia." *Ph.D. dissertation, University of California at Santa Cruz.*

Fox, Jonathan and Rivera-Salgado, Gaspar. 2004. Building Civil Society Among Indigenous Migrants. In Fox, Jonathan and Rivera-Salgado (Eds.), *Indigenous Mexican migrants in the United States.* (California : Center for Us-Mexican Studies), pp. 1-65.

Kearney, Michael. 1995. "The Effects of Transnational Culture, Economy, and Migration on Mixtec Identity in Oaxacalifornia". in Michael Smith and Joe Feagin (eds.), *The Bubbling Cauldron: Race, Ethnicity, and the Urban Crisis.* (Minneapolis: University of Minnesota Press) pp. 226-243.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山越英嗣	4. 巻 45(2)
2. 論文標題 研究成果として「アートによる「生活空間の脱植民地化」をめざして オアハカの民衆聖像崇拜とアクチュアリティの共鳴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 359 - 382
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00009616	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山越英嗣
2. 発表標題 ロサンゼルスのおアハカ移民が形成するトランスナショナルなコミュニティ - OROのセラゲッツァ祭におけるダンスグループを事例に
3. 学会等名 日本文化人類学会第56回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山越英嗣
2. 発表標題 ロサンゼルスのおアハカ人同郷者会OROが形成する異種混淆のコミュニティ
3. 学会等名 第42回日本ラテンアメリカ学会定期大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山越英嗣
2. 発表標題 『21世紀のメキシコ革命 オアハカのストリートアーティストがつむぐ物語歌』著者解題
3. 学会等名 現代文化人類学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山越英嗣
2. 発表標題 「ICT を通じたデジタル空間におけるストリート アート共有慣行に関する試論」
3. 学会等名 国立民族学博物館若手共同研究（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山越英嗣
2. 発表標題 「オアハカ人」とは誰か？ - カリフォルニアのOROのゲラゲツァ祭における文化的市民権
3. 学会等名 第40回日本ラテンアメリカ学会定期大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山越英嗣	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 252
3. 書名 21世紀のメキシコ革命：オアハカのストリートアーティストがつむぐ物語歌	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関